

「チャンポン代返せ」

西南学院大学教授 宮 原 哲（78期）

私は高田先生が嫌いだった。10年間のアメリカでの生活を終え、母校西南学院大学に奉職し、教職員と仲良くしたい、という気持ちを込めてみんなに「今日は」、「お早うございます」とあいさつした。ほとんどの人が返事をしてくれるのに、一人だけ、いくらあいさつしても知らん顔、それもふんぞり返って通り過ぎて行く人がいた。高田駒次郎先生だった。

「ふん、こんなやつあいさつなんかするもんか」と思い始めたが、だれもが「タカダセンサー」と、親しみ、あるいは尊敬の気持ちを込めて口にする。こうなると、「何とか、その高田先生とやらにあいさつをして、返事をしてもらわないと気が済まない」と思い始めた。

当時、西南の教員の中で最初に親しいおつき合いをさせていただいた日野先生に、「いくらあいさつしても知らん顔する高田とかいう人、感じ悪いですね」と言ったら、「そんなことはない」と一蹴された。「じゃあ、今度紹介してやろう」ということになり、やっと高田先生と一対一で話をするのができたのは、西南に来て1年近く経った頃だった。

でも、それ以降、同じ西南の教員、という関係より、先輩と後輩という関係で急速に親しくしていただいた。学生部長選挙の日の昼休み、高田先生に「オレに投票してくれ、今日の昼飯代は払うけんくさ」と買収された。私はそのことをころっと忘れて他の人に投票したら、予定の票数より1票足りないことに気がついた先生が、教授会の途中、後ろの席に座っていた私に、あの大きな声で「チャンポン代返せ！」と言われた。そのときの先生の顔には穏やかな親しみがあふれていた。

周囲の目などほとんど恐れずに、しかし、驚くほど多くの人に細やかな気配りを欠かさない高田先生に対する親しみと、愛着の気持ちがどんどん大きくなったのはこの頃からだろう。しばらくおつき合いするうちに「オレの後、あんたが野球部の部長になってくれ」と言われた。先生にとって野球部がどんなに大切に、誇りだったかを知っていた私は、「冗談でしょう」と答えるしかなかった。

適当な時期から部長見習いとしてベンチ入りし、高田先生の定年と同時に野球部新部長に就任することを約束した。まだまだ先のことだろう、と思っていたが、部長になってすでに6年あまりになる。その間の成績は、と言えば、ご存知の通り。今頃高田先生は「だれかほかのやつにするべきだった」と悔やんでおられるかも知れない。でも、学生が野球という課外活動を通して、人間として成長するのを手伝い、それを通して自分も成長するという点では先生の気持ちを受け継いでいる、と思っている。

感じ悪い人、と思っていた高田先生を通して、私はいろんなことを教えてもらった。アメリカから帰国して「日本の心」を教えてくださいました大事な恩師だ。高田先生の奥深い人生観を通して学んだ教訓は何にも換え難い。高田先生は私の心の中でいつまでも生き続けている。本当にありがとうございました。